

武士遺跡におけるいわゆる「方形周溝遺構」について

神野 信・笹生 衛

1. はじめに

養老川右岸の標高約75m前後の台地上に立地する市原市武士遺跡（第1図）は、1987年度に開始された当センターによる発掘調査も1989年度をもって終了した。その結果、縄文時代中期後半（加曾利E III式期）から後期前半（堀之内1式期）にかけての竪穴住居430軒以上と掘立柱建物2棟、土坑1000基が検出され、その膨大な資料の整理作業の進展が今後注目されるが、それ以外に41基検出されたいわゆる「方形周溝遺構」もまた、注目すべき成果としてあげられよう。

いわゆる「方形周溝遺構」は、近年、益々その調査例が増えており、その性格についての議論も新たな段階にさしかかりつつある様に見受けられる。そこで、武士遺跡におけるまとまった「方形周溝遺構」の資料は、まだ未整理の段階ではあるが、今後の研究を進める上で大きな意義があるも

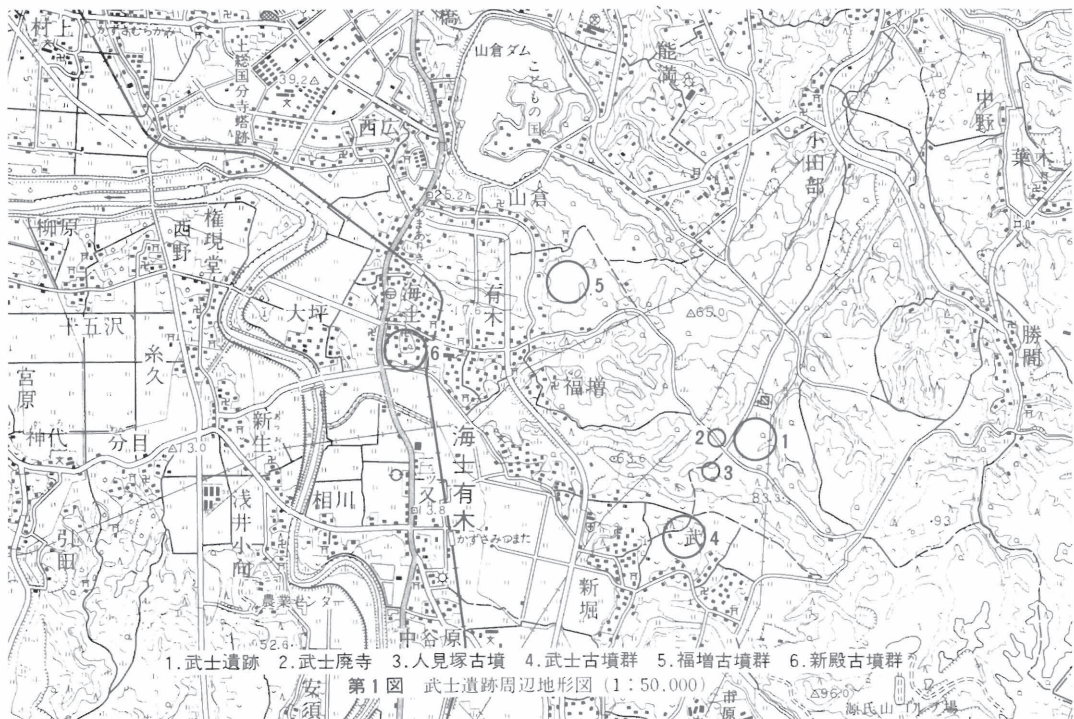
のと思われることから、ここにその概要を紹介することにしたい。

2. 遺構・遺物について

(1) 遺構について

武士遺跡において検出された「方形周溝遺構」は41基であるが、これ以外に埋葬施設のみ検出されたものが2基調査されており、今回はこれらも含めてとりあげる。

まず、平面形であるが、「円形周溝遺構」のSC-19を除いてほぼ正方形をなしている。また、方台部の規模は、1) 中軸長が15m以上のもの、2) 10m前後のもの、3) 5m前後を中心としながらも4m～8m間にバラつくもの大きく3グループに分けられそうであるが、大多数のもの(33基)は3)に含まれる(第1表)。なお、1) 中軸長が15m以上のものは、「円形周溝遺構」と副葬品や溝





第2図 遺構配置



遺構 番号	規模(南北×東西) m		軸方向	埋 葬 施 設	時 期	備 考
	方台部	周溝外				
SC01	5.3×4.9	6.4×6.0	N-39°-E			
02	5.8×—	7.8×7.9	N-7°-W			
03	10.5×10.6	12.6×12.7	N-12°-W			
07	5.1×5.0	6.4×6.4	N-3°-E	地下式墳(B1)	9c第2四半期	
08	10.2×8.8	11.0×10.6	N-61°-W	地下式墳(B1)		
09	7.0×7.3	8.4×8.8	N-24°-E			
10	7.1×7.0	8.2×8.5	N-2°-E	地下式墳(B2)	8c後半～9c初頭	
11	6.9×6.8	8.3×8.2	N-2°-E			
12	6.7×6.6	8.4×8.4	N-34°-E			
13	10.6×10.6	13.0×13.2	N-13°-E			
14	7.8×8.4	9.9×10.6	N-8°-E			
15	8.6×8.1	10.4×9.8	N-16°-E			
16	5.2×4.6	6.1×5.7	N-37°-E			
17	4.0×4.6	5.1×5.6	N-35°-W	地下式墳(B2)		
18	4.0×4.0	7.2×7.0	N-1°-E		9c第2四半期	
19	15.5×13.9	17.9×17.0	—			円形周溝
20	—	—	N-5°-W	地下式墳(B2)		周溝なし
21	16.9×16.7	19.7×19.8	N-9°-W	土墳(A1)3基	7c第3～4四半期	溝内埋葬
22	4.4×4.4	5.8×5.6	N-12°-E			
23	4.7×4.8	6.3×6.2	N-10°-E			
24	4.4×5.7	5.9×7.1	N-8°-E	石櫃2基		
25	4.9×4.9	6.8×6.8	N-18°-E			
26	4.0×3.8	5.5×5.0	N-38°-W			
27	4.3×4.5	8.1×8.0	N-11°-E		8c後半～9c初頭	
28	3.4×3.6	4.8×4.8	N-3°-E	土墳(A2)		
29	7.4×7.2	10.1×9.8	N-9°-W	地下式墳(B1)	8c前半	
30	5.9×6.1	7.1×7.4	N-6°-W	地下式墳(B2)		
31	7.4×8.0	9.9×10.6	N-1°-W	石櫃1基		溝内貼床
32	6.2×6.4	9.8×10.0	N-1°-E	石櫃1基		
33	7.7×8.1	10.9×11.0	N-5°-E			
34	11.0×12.8	13.2×14.7	N-9°-E	土墳(A1)2基・石櫃2基	7c第3～4四半期	
35	9.8×9.4	11.9×12.0	N-3°-E		8c後半～9c初頭	
36	6.7×7.2	9.0×9.2	N-13°-E	石櫃2基		
37	5.2×5.5	7.4×7.8	N-5°-W		8c後半～9c初頭	
38	—	—	—	石櫃1基		周溝なし
39	7.6×7.8	10.0×9.5	N-6°-W	石櫃1基		
40	8.6×8.4	10.5×10.2	N-4°-E	石櫃1基		
41	3.8×4.2	7.2×7.1	N-2°-E			
42	6.7×—	8.3×—	N-4°-W			
43	5.5×5.2	6.6×6.5	N-11°-E			

第1表 遺構一覧

内埋葬施設を伴う SC-21からなる点に特徴がある。

埋葬施設は、単独のものを含めて17基のみ検出されており、その大部分が後世の削平によって失われたと考えられる。埋葬施設の在り方には、バラエティーが認められるが、おおよそ次の様に分類できる。

A；土壇

- 1：木棺直葬と推定される長方形土壇（SC-21・34）。
- 2：火葬骨が埋納される小規模な円形土壇（SC-28）。

B；地下式墳

- 1：周溝外から周溝内に緩やかに下がっていく「前庭部」から、方台部に向かって「玄室」を掘り抜く。「玄室」形態は多様で、灰釉蔵骨器を納めた奥行きのない小規模なもの（SC-07）、入口部から左右に広がる「T」字形をなす火葬骨を納めたもの（SC-08）や、非火葬骨を納めた奥行きのある横穴をなすもの（SC-29）がある。
- 2：周溝内に堅坑を掘り込み、方台部に人が入れないほどの小規模で不整形な横穴を掘り抜いて「玄室」とする（SC-10・17・20・30）。

C；蔵骨器埋納

方台部内に方形の土壇を掘り込み、その中に凝灰質砂岩製蔵骨器（石櫃）を埋納する（SC-24・31・32・34・36・38～40）。石櫃は、方形の「蓋」と「身」からなり、「身」の納骨穴内に火葬骨が納められている。

A 1以外の埋葬施設は、火葬骨・非火葬再葬骨を埋納するための施設であり、玉類が副葬されていた SC-21の A 1を除いて、副葬品類はまったく認められていない。また、前述の方台部規模との関連を見た場合、A 1は中軸長10m以上の比較的規模の大きいものに限られるように見受けられるが、他の埋葬施設は、基本的に特定規模に集中する傾向などは認められず、特に強い相関関係があるとは思われない。これらの埋葬施設の差異が何に起因するものかは、現段階では明かでない。

なお、周溝を伴わない埋葬施設は、B 2・Cの形を採るが、周溝を伴うものとは形態的・構造的に差異は認められない。

(2) 遺物について

一般的に「方形周溝遺構」は伴出遺物が乏しく、時期決定等が困難な場合が多いが、本遺跡においても例外ではなく、その検出数に比べて出土遺物はきわめて少ないといえる。その中で、現段階において図示し得たものをあげておきたい（第3図）。

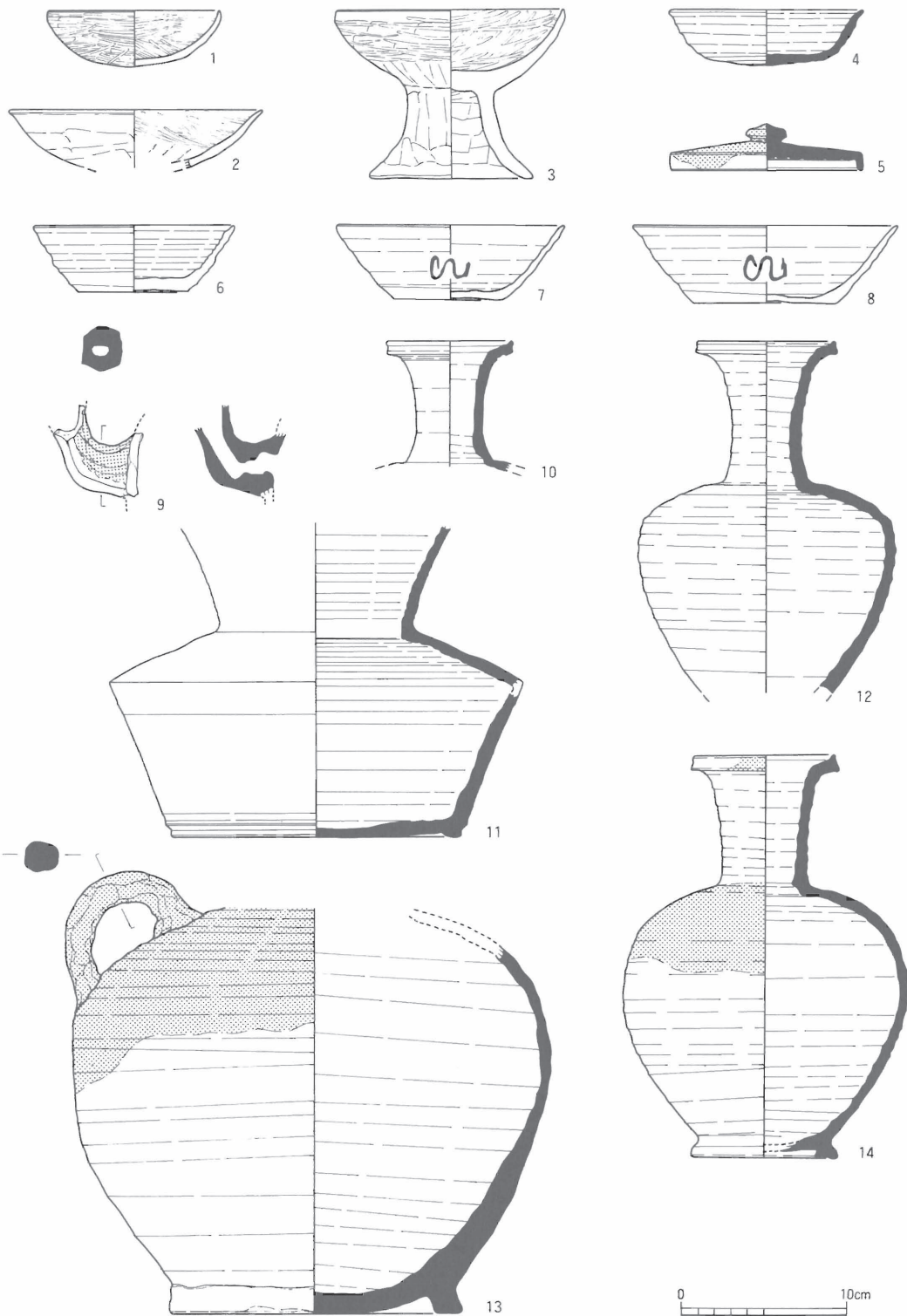
1・3・4は、SC-12の周溝内土壇周辺出土のものである。1は口径10.4cm、器高3.4cm、丸底の土師器坏で、内外面にヘラ磨きを施す。3は口径13.8cm、脚部径9.8cm、器高10.2cmの土師器高坏で、坏部内面には1と同様にヘラ磨きが施される。4は口径11.9cm、器高3.3cmの須恵器坏で、底部外面にはヘラ切り痕が残されている。1・2は、SC-34の石櫃の裏込め内から出土した丸底の土師器坏で、体部内面にはヘラ磨きが施されている。1・2の土師器坏は、法量・形態が飛鳥第IV期の土師器坏に類似しており（西1986）、4の須恵器坏は、愛知県岩崎17号窯出土の無蓋坏に形態・調整技法の上で共通点が認められる（檜崎 1981）。これらのことから、7世紀第3～4四半期を中心とした年代が考えられる。

10は、SC-29出土の須恵器広口瓶である。類例は湖西市大沢第4地点II・III号窯の出土品に見ることができる（後藤 1985）。ここでは「伊場A類」に当たる須恵器坏も焼成しており、8世紀前半代の年代を与えることができよう。

5・9は、SC-27出土である。5は口径11.5cm、器高2.8cmの薬壺の蓋で、天井部外面全面に灰釉がかかっている。9は浄瓶の受口部片で、外面はヘラ状工具で丁寧な面取りが施されている。いずれも胎土は精製された灰白色のもので、作りも丁寧である。ともにO-10号窯式前後に属すると考えられ、8世紀後半代の年代が想定できる（註1）。

11・12・14は、それぞれSC-10・35・37出土の灰釉長頸瓶である。いずれもO-10号窯式～IG-78号窯式段階に属すると考えられ、8世紀後半代～9世紀初頭の年代が想定できる（檜崎 1983）。

7・8・13は、SC-07出土の蔵骨器である。13は底径17.6cm、残存器高24.6cmの大型の把手付瓶である。類例としては、やや小振りであるが、平城京SE-715出土品中のものをあげることができ、この遺構については平城上皇死去頃（824年）



第3図 出土遺物

の年代が考えられている(西他 1976)。7・8は、13内に合口の形で納められており、明らかに13と同時に埋納されたものである。口径13.8cm～16.1cm、器高4.5cm～4.7cm、底径6.8cm～8.9cmで、底部から体部下端にかけて回転ヘラ削りが施されるロクロ土師器である。形態・法量・調整技法ともに八千代市北海道遺跡出土の「承和五年(838年)銘墨書土器に類似しており、この土器も9世紀第2四半期を中心とした時期のものと考えられる(藤岡他 1985)。

6はSC-18出土で、口径12.1cm、器高4.0cm、底径6.5cmのロクロ土師器である。形態・調整技法は7・8と同様であり、やはり同時期のものと考えられる。

3. まとめ

武士遺跡の北に隣接する勝間遺跡では、「方形周溝遺構」が1基しか検出されておらず(註2)、本遺跡における調査区北寄りに集中する「方形周溝遺構」のあり方から見て(第2図)、ほぼ一群を完掘したと考えて差し支えないといえる。その結果、本遺跡の「方形周溝遺構」は、7世紀後半に造墓が開始されるものの、本格的な群形成は8世紀から9世紀にかけてであり、火葬・再葬を採用した方台部中軸長5m前後程度の概して小規模なものが主体を占めるという特徴が指摘できよう。しかし、残念ながら検出された埋葬施設・出土遺物が少ないため、具体的な群構成及びその形成過程や、多様な埋葬施設の評価等、現段階では明らかにされない点が多く残されている。

近年、この「方形周溝遺構」の評価については、後期古墳群からの継続性が指摘される等(渡辺1985他)、現象的には「古墳」との差異が不明瞭となりつつあるように見受けられる。確かに武士遺跡の南西にも埴輪を伴う前方後円墳・人見塚古墳を含む武士古墳群が存在しており(第1図)、本遺跡の「方形周溝遺構」の形成もその延長線上で捉えることは可能であろう。しかし、本遺跡周辺の古墳群は、養老川を臨む段丘上に位置するのに対して、「方形周溝遺構」は台地深奥の村田川の支流・神崎川によって開析された小支谷に沿って展開しており、この様な地点において8世紀から9世紀にかけて、新たに群形成の盛期を迎える点から、お互いにその成立背景を異にしている可能性が強

く(註3)、本遺跡でも多量に出土している布目瓦から推定される「武士廃寺」との関連の方に留意すべきであろう。

いわゆる「方形周溝遺構」は、7世紀から9世紀にかけての古墳時代から「律令体制段階」にいたる社会的・政治的背景を知る上で重要な位置を占めるものと思われたため、武士遺跡における資料を不十分な内容ではあるが、その概要をここにとりあげた。今後、整理が進むにつれて、更に多くのことが明かとなり、新たな問題を提起して行くであろうが、それは本報告に委ねたい。

註

- 1) O-10号窯式の年代については、現在ではK-14号窯式の年代を9世紀前半から中頃にかけて考えるのが妥当と思われるので、8世紀後半の年代を想定した。
- 2) 勝間遺跡は、市原市によって調査されているが未報告である。
- 3) 「古墳」の定義については議論の分かれるところであるが、墳墓の墳丘規模及び形態・埋葬施設・副葬品等によるひとつの社会的・政治的秩序の表示という、仮説的な定義によって規定される点では共通しているといえよう(近藤1977・間壁他 1977他)。この定義から見た場合、果たして武士遺跡の「方形周溝遺構」が「古墳」といえるかは、現段階では甚だ疑問といわざるを得ず、やはり「古墳」と区別する必要があるように思われる。従って、8～9世紀に新たな造墓の盛期を迎えるこの種の方形を基調とする小規模な墳墓を今後、「方形墳墓」とすることを提案しておきたい。

参考・引用文献

- 近藤義郎 1977 「前方後円墳の成立」『考古論集』
1983 『前方後円墳の時代』 岩波書店
- 檜崎彰一 1981 『老洞古窯跡群発掘調査報告書』 岐阜県教育委員会
1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告書III』 愛知県教育委員会
- 西 弘海 1976 『平城宮発掘調査VII』 奈良国立文化財研究所
1986 「七世紀の土器の形式変化と時